

インド・ムンバイ日本人学校における国際理解教育・現地理解教育

前ムンバイ日本人学校 教諭

愛知県名古屋市立笹島小学校 教諭 友松 功

キーワード：英語、ヨガ、グルモハル祭、学習発表会、修学旅行

1. はじめに

私の教師になる前からの夢であった、在外教育施設で教鞭をとることが実現した。それもインドという私にとってとても魅力的な国であった。しかしながら、インドで生活をするということは予想していた以上に過酷なことであった。驚きの連続であった。日本とは全く違う文化に戸惑うこともあったが、インド人の多くの人はとても親切で温かかった。インド・ムンバイ日本人学校で3年間勤務できたことは、とても貴重な体験であった。ここに、その概略を紹介したい。

2. 前任者からの引き継ぎと現実

(1) ムンバイ在住の子どもたちの実態

「ムンバイに住んでいる子どもたちは、真面目で素直で、とてもよい子どもたちである」前任者からの引き継ぎでそのように聞いていた。実際にムンバイに行ってみると、本当にその通りであった。ほとんどの子どもたちが元気に笑顔で挨拶をしているし、全校児童生徒で約30人という小さな学校であったので、みんなが仲良く、本当に家族のような学校であった。小学生と中学生も仲良く、下級生は上級生を、お兄さん、お姉さんのように慕っていた。インドは環境が劣悪で、生活は厳しかったが、ほとんどの子が毎日楽しそうに学校に通っていた。しかし、ここにいる多くの子どもたちが望んでインドで生活しているわけではなかった。日本人学校があるから、子どもを連れての駐在を決意したという家庭もあった。あらためて在外教育施設の存在の大切さを感じた。

(2) 保護者や地域の要望

ムンバイ日本人学校の子どもたちは、学力も平均的に高く、英語に対する関心も高い。もちろんこれは保護者にも同じことが言えて、日本と同等、もしくはそれ以上の教育をしてほしい、ということが要望である。その背景には、ムンバイには日本のような学習塾がないので、塾の代わりとなるような補習授業をしてほしいという要望もあった。実際に日本の学校と大きく違うところは7時間授業の日が週2回あることだ。それ以外の日も6時間授業なので、授業数はとても多い。小学校3年生以上は、この時間数をこなしているため日本と比べればかなりハードである。その時間の中で、インドの文化も学び、日本の文化も学び、英語の力も身に付けさせたいということが保護者や地域の要望である。

3. ムンバイ日本人学校での日常の取り組み

(1) 英語教育

①インドの英語事情

インドはかつて、イギリスの植民地だったこともあり、インドの多くの人が英語を話すことができる。公用語はヒンディー語であるが、準公用語は英語である。かなり独特な発音で「ヒングリッシュ」とも言われている。最初はかなり聞き取りにくい英語であった。文法も正しくないときが多く、イギリスの英語とは少し違ったものであった。

②ムンバイ日本人学校での英語教育

インド人の英語講師が週に3時間程度、英会話の時間として授業を行っている。ここでは、単に英語だけで

なく、英語を通してインドの様々な文化を学んでいることが大きな特徴である。ユニークな取り組みに、「English Breakfast」というものがあった。インドの朝食を、英会話を交えて講師と子どもたちで作るというものであった。これはインドの食文化も学べるというものであった。その他にも「Movie Day」という日もあり、ムンバイで有名な「ボリウッド」の映画を見て感想を英語で話すという、楽しく英語も文化も学べるものであった。このように、英会話だけでなく、英会話の授業を通してインドの文化を学べるという点でとても有意義な活動であった。もちろん子どもたちは英会話の時間が大好きで、インドの文化も学び、少しずつではあるがインドを好きになるきっかけともなっていた。

③校外学習

英会話の時間は積極的に校外学習に出掛け、現地の方との交流も積極的に行っていた。低学年の児童は学校の近くのスーパーマーケットに行き、英語で買い物をするという授業である。高学年や中学生は、大きなショッピングモールに出掛け、買い物と食事をするという活動である。その他にも、「English Café」という活動もあり、子どもたちが自ら注文して英語で会話するというものである。いずれの活動も、インドで学んだ英語を実践的に使うということで、子どもたちにとって学んだことを実践で生かすとてもよい機会である。ムンバイはインドの中では比較的治安のよい地域と言われているが、近所であっても日本のように子どもたちだけで買い物に出掛けるという機会は、危険なので、学校で英語講師や教師引率の中でこのような行事が行えることはとても貴重な体験になっている。

(2) 現地理解教育

①ヨガ

インドといえば、ヨガを思い浮かべる人が多いと思うが、実際にインドの街を歩くと、いたるところでヨガをやっている。日本人学校でも、インド人のヨガの先生を招き、週2回朝の活動としてヨガを行っていた。朝にヨガを行うと、体もすっきりし、脳も活性化され、学習面にもプラスに働くようである。ヨガの動きやポーズだけでなく、呼吸法や姿勢、食事の取り方など、様々なことを学ぶことができた。実際に、ムンバイ日本人学校の体力運動能力調査の結果を見てみると、柔軟性を必要とする種目の結果がとてもよかった。これは週2回、朝ヨガを行った効果であると考えられる。

②インドダンスクラブ

インドダンスも、インド人の方を講師に招き、英語でレッスンを行っている。インドの伝統的なダンスや、映画産業の盛んなムンバイで流行っているボリウッドダンスも学ぶことができた。これらのダンスを学習発表会で発表したり、クールジャパンとよばれるイベントに招待されて発表したりと、発表機会はたくさんあったので、子どもたちも満足感を得ることができていた。このように、インドの方に、日本人が学んだインドダンスを披露してたくさんの拍手をもらうことも、忘れられない経験になったのではないかと思う。インドの方はお祭り好きで、陽気な人が多いので、日本で発表する以上に大きな歓声、拍手の中で発表できるということは本当にすばらしいものである。



インドダンスクラブの様子

③インド体験クラブ

ダンスだけでなく、インドの文化に触れる体験も行った。インドの多くの方が飲んでいる「チャイ」という飲み物の作り方を学ぶ活動も行った。またムンバイ近郊に紙づくりに有名な地域があり、それらの紙を貼り合

わせて作品をつくることも行った。インドの伝統的な絵画の技法を学んだり、インドの伝統的な楽器を演奏したりと、とても充実した活動であった。現地に住むインドの方からこのようなことを楽しく学べることは、とても好評であった。

④スポーツを通しての現地理解

インドで最も人気のあるスポーツは、クリケットである。大人も子どもも空き地や道路で朝から晩までクリケットを行っている光景をよく目にする。日本ではあまり馴染みのないスポーツではあるが、世界的には人気スポーツで、サッカーに次いで競技人口が多いとも言われている。イギリスから伝わったスポーツである。野球の原型とも言われている。子どもたちも、総合的な学習の時間などを利用して、このクリケットを学ぶことがあった。ルールをインド人スタッフから教わり、実際に体験したこともあった。

クリケットの他にも、カバディーというインド発祥のスポーツも人気である。攻めているときは、「カバディー、カバディー」と言い続けなければならない変わったルールのスポーツである。インドではプロリーグもあるようなメジャースポーツである。

最近では、サッカーやフットサルなどの日本でも人気のあるスポーツがインドでも流行りつつある。特にサッカーでは、日本人のプロ選手が数名インドサッカーのプロリーグで活躍している。子どもたちと応援に行ったこともあった。このように、スポーツを通してインドの文化を学ぶことができた。

4. ムンバイ日本人学校の行事

(1) グルモハル祭

7月の中旬あたりに、グルモハル祭という行事が毎年行われる。グルモハルというのはインドで有名な花の名前であるが、行事の内容は、インドの学生を日本人学校に招待し、日本の文化を伝えることや、交流を目的とした行事である。午前中は、インドの小学生を招き、お祭りの縁日（射的やヨーヨーつり、折り紙など）を行っている。説明はすべて日本人学校の子どもたちが英語で行っている。日常生活では、あまりインドの子どもたちと日本人学校の子どもたちが関わることはないので、グルモハル祭は大変貴重な体験のできる行事である。午後は大学生を招き、一緒にゲームをしたり、日本の文化（四季やお祭りなど）を発表したりする行事である。



グルモハル祭の様子

(2) 学習発表会

10月から11月のあたりに行われる学習発表会は、1年の中で最も大きな行事である。学習発表会は保護者だけでなく、日本人会の方々や領事館の方々、インドの学校の先生や学生も招いてたくさんの参観者の中で子どもたちが発表する行事である。子どもたちがインドの文化や宗教、世界遺産などを調べてそれを発表することがメインである。それだけでなく、クラブで習ったインドダンスを披露したり、すべての台詞を英語で行う英語劇を行ったりしている。また、インドのことだけでなく、日本の学校でもよく行われるソーラン節も披露している。2学期になると、学習発表会に向けての練習で本当に忙しくなる。

(3) 社会科見学

ムンバイの観光資源は豊富とはいいがたいが、イギリスの植民地時代を思い出させる歴史的な建物もたくさん

ある。それらの場所に全校生徒で社会科見学を1年に1度行っている。ムンバイで最も有名な「タージ・マハール・ホテル」を見学したり、その近くにある「インド門」を見学したりと、毎年違う場所を見学している。博物館に行って歴史を学んだ年もあった。

(4) 修学旅行

ムンバイ日本人学校の子どもたちが一番楽しみにしている行事は修学旅行である。小学校1年生から4年生は「野外活動」として1泊2日でムンバイからバスで3～4時間程度の場所で宿泊して活動を行っている。小学校5年生から中学生は2泊3日、飛行機でインド国内を旅行するのが修学旅行である。行き先は毎年変わり、インドの首都である「ニューデリー」に行くときは世界遺産を巡るだけでなく、ニューデリー日本人学校との交流も行われる。その他にも、「チェンナイ」や「コーチン」といった観光地に行くことが多い。

私が修学旅行を担当した年は、インドのシリコンバレーと呼ばれる「バンガロール」に行った。ICT(Information and Communication Technology: 情報通信技術) 機器が発達しているインドの中心となる地で、世界的に有名なコンピュータの企業のほとんどがこのバンガロールに拠点を置いている。日本でも多くの人が使っている有名なスマートフォンも、実はバンガロールで作られているのである。日本ICT企業もたくさん進出しており、日本の自動車企業の工場もある。中学生の社会科の教科書にも、このバンガロールの写真が載っており、修学旅行に最適な場所ではないかと私は考えた。

実際に見学に行くと、日本の企業であっても働いている人の多くはインド人であることに子どもたちはとても驚いていた。その働いている人は必死に日本語を学び、日本の文化にも興味をもっていてくれることにも喜んでいった。また、日本の企業が世界進出して活躍していることに、日本人の誇りだと子どもたちは感じていた。インドの文化を学ぶことも、もちろん大切であるが、インドに来たからこそ、日本のよさにも気づくことができる、これも国際理解教育の大事な部分ではないかと私は思った。

5. おわりに

3年間のインドの生活を振り返ると、驚きの連続であったせいか、本当にあつという間に過ぎてしまった。日本人のインドに対するイメージは必ずしもよいものとは限らないが、住んでみると本当のインドが少し味わえた気がした。それは、人の温かさである。日本で報道されているような残念なニュースも、もちろん事実ではあるし、マーケットに行き、日本人だと分かれば、騙してくる人もいないわけではない。しかし、これまで関わってきた、英会話の講師、インドダンスを教えてくれたダンスの先生、毎朝短い時間であっても笑顔でヨガを教えてくれるヨガの先生、インド体験クラブや社会科見学を企画、運営してくださった講師の先生、学校の様々なことを手伝ってくれるインド人スタッフ、私も、もちろんであるが子どもたちも、このような温かいインド人スタッフに囲まれて生活していくことが国際理解・現地教育理解の最も近道ではないかと私は考えている。

インドの方は、たいていエレベーターで一緒になると笑顔で話しかけてくる。「あなたの国はどこ？インドの生活はどう？」といった感じに毎回のように笑顔で話しかけてくる。道に迷っていると、インド人の方から「大丈夫か？私が案内しようか？」と、ひとりではなく、何人の人も集まって案内してくれる。これもすべてインド人の温かさ、優しさであると思う。

また、祝日には、インド人は必ず服のどこかにインド国旗を身に付けて祝っている。国歌を大切にし、映画館でも映画の前には必ず国歌が流れ、大合唱をしている。国を愛する気持ちは、残念ながら日本ではあまり感じるができない。素直に国を愛していることもインドのよさのひとつである。インターネットで調べるだけでは分からない現地のよさを肌で感じるができることが、一番の国際理解ではないかと私は考える。子どもたちもインドでたくさんのお話を今日も学んでいる。